

オリーブの樹

第146号

2019年6月2日

شجرة الزيتون

早期釈放！ 重刑策動をはね返し、重信さんを支えていこう！



目次

- P 2 ナクバの5月 パレスチナ連帯を込めて 重信房子
- P 4 春の歌 重信房子
- P 5 独居より 重信房子
- P 11 読んだ本 重信房子

重信房子さんを支える会

ナクバの5月 パレスチナ連帯を込めて

1948年のあのナクバの5月から71年目の5月、そしてまた、リッジ闘争から47年目の5月を迎えています。今、パレスチナは再びナクバの危機に直面しています。いやずっとナクバの危機の中にあると言っても過言ではありません。

トランプ政権のエルサレム併合による「イスラエルの首都」承認。入植活動支援、シリア領ゴラン高原・イスラエル併合承認という歴史と国際法破壊行動に乗じて、ネタニヤフは4月、西岸入植地併合を宣言して選挙に勝利しました。

シオニスト方針が次々と「米の中東政策」と化している現実には歯止めがありません。今後更に、「反イラン同盟」の名でサウジやエジプトを巻き込み、パレスチナの自決・独立の権利を無視した中東和平案（パレスチナ最終解決案）を押しつけようとしています。

すでに2014年にネタニヤフが米・オバマ政権に示した案は明らかにされています。「帰還の権利」もエルサレムの返還も認めず、西岸地区の大部分を併合し、その併合分の代償に、エジプト領のシナイ半島北部をパレスチナ側に割譲させ、西岸のパレスチナ住民の密集地区・ガザ地区及びシナイ半島北部でパレスチナ国を造らせるという内容です。またトランプ・クシュナーらの示した「パレスチナ問題の最終解決構想」は2017春ごろからリークされていましたが、似た内容です。第一にアラブ諸国にパレスチナ難民を同化させ難民の地位を解消させる。第二に西岸地区のパレスチナ自治区を準国家と認めて、ヨルダンとの国家連合とさせる。第三に、西岸全体の61%にあたるC地区をイスラエルに併合する。（註：94年「オスロ合意II」によって西岸全体を区分けした。A地区はパレスチナ自治政府による完全自治区を示し、B地区はパレスチナ自治政府の行政、イスラエル軍による治安警察権、C地区はこれまで通りのイスラエル軍政下を示しており、数年でB、C地区をA地区に編入し自治区を完成させると合意約束されてきた。このC地域は、ヨルダン国境地帯の戦略要所・水資源240箇所以上を数えるユダヤ入植地を擁している。当時から見ると、C地域の入植地とユダヤ人口は増大した。しかし、A地区は当時とほとんどかわらず、今も18%にすぎない。しかもイスラエル軍は必要に応じてA地区に検問所を作り、家宅捜索し、パレスチナ人逮捕を行っている。）

第四にエルサレムはイスラエルの首都とする。パレスチナ準国家の首都はアブ・ディスとし、これを「新エルサレム」とする。（註：アブ・ディス村は東エルサレム郊外の村で、2000年のPLO・アラファト議長が参加した最後のワシントンでの最終的地位交渉で、イスラエル側がパレスチナの首都として示し、アラファト側が拒否し決裂したもの）というものでした。

このトランプ・クシュナー案は、その後もネタニヤフと協議しつつ、サウジやヨルダンに示しながら、最終的な「世紀のディール」「米・中東和平案」へと再編し、近々発表されると大げ

さにキャンペーンを張っています。そして、中東和平の一部として投資促進の会合を5月に予定しています。「政治的合意」が進まない中「パレスチナ経済支援」と銘打って、イスラエルのために占領地への投資を促進させる魂胆です。

その一方で、米政府の「新しい中東和平案」では、イスラエルの意向をこれまで通り支援し、「パレスチナ国家」を認めるとしても、西岸ユダヤ入植地はイスラエルの統治下に置かれるとし、パレスチナ側が米の和平案を拒否すれば、次にはすべてのパレスチナへの財政支援を中止するという脅迫も控えています。エジプト、ヨルダンに財政支援で黙らせ、サウジ・イスラエルの反イラン同盟を強化し、パレスチナ自治政府・PLOに対する財政的締め付けをもって、イスラエルの意向を実現させようとするでしょう。

歴史をふりかえれば、「パレスチナ問題」は世界の公正と良識を示すバロメーターの位置にあります。かつてはイスラエルの占領・国際法無視を糾弾し、パレスチナを政治的・物質的に支える国が今よりも多く存在していました。「シオニズムは人種差別主義」と決議した国連総会もありました。今、パレスチナは国際社会の支援を益々必要としながら、かつてよりも国家の支援は弱まり、UNRWAの拠出金も米の凍結の中で厳しい運営を迫られています。

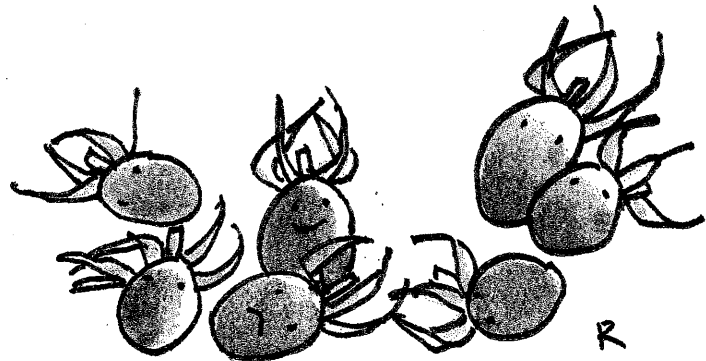
新たなナクバともいえるパレスチナの民族自決・独立の消滅の危機の中、パレスチナの人々は不屈に生存の闘いを闘い続けています。パレスチナ帰還の行進はガザ地区ばかりか西岸地区、ヨルダン・シリア・レバノンのアラブや世界に散らざるを得なかったパレスチナ難民600余万の心をつなぐ結びつけています。BDS運動は世界各国の支援と連帯を育てています。しかし国際世論も国連決議も国際法も無視したイスラエルは併合を加速させ、2月レヴィ観光相は「更に100万のユダヤ人の入植を短期に実行すべきだ」と主張している有様です。何としてもイスラエルの暴虐と併合を許す訳にはいきません。

リッジ闘争の闘いを共にしたパレスチナのアラブの世界の友人たちの連帯の力を今思い返しています。再び一丸となったパレスチナの解放を願いつつパレスチナの反占領、自決と独立の闘いに連帯します。そして、パーシム奥平、サラハ安田、アハマッド岡本、オリード山田、ユーセフ檜森に敬礼します。彼らの献身・情熱意志を熱く胸に抱きつつ連帯を誓い、この5・30を迎えたいと思います。

重信 房子

重信 房子

戦死の報の後に届きし君の文父母に詫びつつ記せし矜持
 奪われて虐殺されてまた奪われてパレスチナナクバ今も続きぬ
 花筏魂魄乗せて春うらら父も恩師も友も命日
 もう何本杭を打ったか辺野古の海抵抗の証海底も叫ぶ
 パレスチナ絶望する程暇じゃないと語りし友の逝きて十八年
 オリーブの老木雪に埋もれつムスカリ咲き初む戦場の春
 ふきのとう無人の原に咲き初む頃双葉も浪江も帰れぬ古里
 難民と生まれて闘い生涯を難民戦士と弔われし友は
 一月尽殺意無きまま殺したと旧友を語れる冗舌憎し



2月14日～5月15日

パレスチナに沖縄に連帯する5月です

重信 房子

2月14日 風の強い屋上でハッピーバレンタイン! とみな笑顔。何かをみつけてはみんな楽しみを探す明るい人々です。運動に出て来れる人の数は限られているせいかもしれません。Mさんの送ってくれたネットと写真届きました。その中に冤罪・布川事件の桜井昌司さんが尊敬する人として、泉水博さんの名をあげて「泉水さんが千葉刑務所に入っている時に、仮釈放を目前にしながら、重篤な病気の同囚のために、正当な医療を要求して一人で決起したんですね。ぼくには全く考えられませんよ。とにかく仮釈放になるまでひたすらじーっとおとなしくしています。これはね、できません。すごい人ですよ。千葉刑務所で語りつがれています。」という話をされたことが記されています。「そうか日本赤軍はそんな人だから泉水さんを指名したのか。集会の場で『ぼくにはできません〜』とおっしゃる桜井さんもすごい」とあります。泉水さんも桜井さんもいい話、嬉しく読みました。ありがとう! また、火曜行動のCさん、Kさんいい笑顔の写真もありがとう! “バレンタイン! 寒風吹き荒ぶ屋上で若き囚徒らハイタッチの真似する” (囚人同士のタッチは禁止なので)

2月21日 武揚伝4冊ありがとう! 丁度「ガザに地下鉄が走る日」を読み終えて、感動の余韻が残っているところで感想文を記そうと書いています。それですぐ武揚伝も読みはじめます。今日はN和尚が月回向法要に来て下さいました。多忙の寒い中感謝しつつ読経を聴きました。今月は特に連赤の友人たちを思いつつ祈りました。今日はさんはTさんの誕生日、ハッピーバースデイを直接和尚から届けて下さいと頼みました。Tさんは古希と言ったら、もっと年では?! と和尚。古希ですよね?! 和尚も古希? 確かめないうちに他の話題に移ってしまいました。次に確かめないと……。今ラジオJウエーブで常岡さんというジャーナリストが海外取材を海外で入国を拒まれた話を本人からインタビューしているのを聞いています。日本の公安が海外に要請して行われるもので、外国が独自に行うことはないでしょう。「何故止められ

たのか? 日本側が要請したからという情報はあっても、証拠的に国と争いにくい」とのこと、それが現実です。公安と外務省の仕業で、私の友人たちも何人もやられました。国内では逮捕容疑がないので、海外の国に頼んで入国拒否させる手口です。ジャーナリストにまでとは……。政権に対する批判者はジャーナリストでも許さない強権が深まっています。

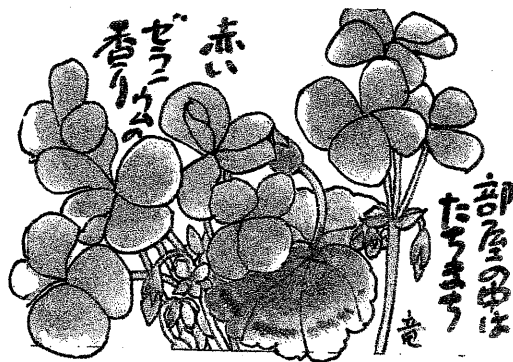
2月25日 午前中待っていた新聞が届いて“辺野古「反対」7割超”「玉城知事の得票超す」投票率は52.48%と一面に朝日新聞。当然反対が多いと思いましたが、投票率と反対の得票がどの位かな、と気になっていました。沖縄の民意が他の県の県議選や知事選などよりも高い投票率でしっかり反対を示したことが、大変有意義です。読売新聞では一面の扱いは小さく、投票率が低いとか影響がないなどの論調で、問題を小さく扱おうとしています。米本土と日本の沖縄県外の市民の共感を育て、反対を現実のものにと願うばかりです。工事も軟弱層の地盤改良に7万7千本の杭が必要だとか、計画自体が無理押し続き。断固とした姿を見せるべきは、沖縄県にはなくトランプ政権なのに、官邸は何をしているのか……。

2月28日 私が48年前、ペイルートへ日本を発った日。いろいろ感慨深いです。丁度、2月の花、みごとな紅梅1m程の枝ぶりの4本に、あわせて背の高い3本の菜の花が届き、わーっ!と思わず歓声です。うれしい春が来ました。花瓶が小さいので、それでも80cmくらいにして、4本の枝を4方に分散させてハサミで調整しつつ飾りました。ぐんと房内が華やかです。夕方には「オリーブの樹145号」も届きました。感謝! 御多忙の中、いつも描いてくださってありがたいです。今号は東大闘争のこと、上原さんが書いて下さいました。当時を思い返します。最後まで振り続けた上原さんの共産同の旗が、屋上から落下する映像は、1.19の象徴的シーンとして、人々にも記憶され

ています。丁度書評の「思い出そう！1968年を！！」にも、その頃のことを触れましたが、御茶ノ水駅から本郷に向かって攻防を繰り返したのを思い出します。荒岱介が「畜生！畜生！」と、うめきながら走り回って部隊に采配を振るっていました。東大組が逮捕勾留されている間に、ブントは分裂、赤軍派7.6事件などが起きるのですが、当時みな本気で変革を！と、持てる力を明らかに尽くしていました。良い文章をありがとう。入力・編集・印刷など、編集室の皆さん、ありがとうございます。

「支援連ニュース」菊池さんの文「東ア」の人々の逮捕状況やメンバーの自供と弁護人解任に抗して、家族たちが弁護士とともに、再び救援センターの弁護人を選任して闘い、支えていった歴史を知りました。家族の強固な連携の力が、どんなに有意義に今に至る支えをつくりあげてきたかを知り、ありがたい絆だと学びました。シャコの元気な様子も「支援連ニュース」から知ることができます。由紀子さんの「刑務所帰り」に対する差別体験のすさまじさ、昔よりも、こぎれいな今の日本の方が、人情が欠ける分、酷いのか……と、思い至ります。

3月9日 東京も春一番が吹きました。今日はもう終わった梅の枝を片付けようと花瓶を洗っていたら、新聞紙に広げた梅の枝と菜の花の茎あたりから、きつと毛虫になる前のニョロニョロとヒルのような虫2匹。啓蟄ですね。梅の枝は枯れつつあるのですが、新芽の緑が生きそうな小枝を折って改めて花瓶に飾りました。窓の外はプラスチック塀で何も見えませんが、きつと東京のはずれの昭島、原っぱには土筆やふきのとうが八王子みたいに咲いている頃です。



3月11日 週末の快晴から雨の昭島です。今日は彼岸法要の日。雨のため屋外の運動はなく早い入浴となりました。部屋に戻って着換え始めたところにN和尚の面会の知らせが届きました。寒い雨の中申し訳ないです。面会室は寒いのでフリースを着ていったら、入浴直後で汗一杯。脱いでまずN僧の読経に法華経を黙読しつつ、3・11の被災者に、それから明日N和尚が導師となって執り行われる遠山さんの墓前法要を思いつつ、遠山さん、山田さんら「連赤」の友人たちに、そしてまた3月15日命日の母のために祈りました。いつもN和尚は姉と連絡しあってくれるのでありがたいです。また、前回の面会の折、できれば遠山さんのイメージに合うトルコ桔梗の青紫にカスミ草の花束を墓に、と話していたのですが、もうトルコ桔梗は手に入るとのことで明日献花して下さること。「三月哀歌」という私の遠山さんを悼む短歌も、御遺族がぜひ明日の墓前に奉納したいとおっしゃっていると知らせて下さいました。これまで大学時代の旧友とご遺族が会う機会がなく、47年目N和尚の努力で一緒に墓参することができ、遠山さんの無念を家族の怒りを愛する遠山さんを共に追悼して、新しい気持ちを拓くことができることを念じています。感謝。

3月13日 今日の午後、障碍者のバイオリニスト式町水晶さんと母の啓子さんの演奏と講演がありました。シンセサイザー風なのかも（よく判りませんが）バイオリンの大音響や東北震災の特別なバイオリンによる静かな浜辺の歌や、力強い「リベルタンゴ」「孤独の戦士」など、合間に自らの障碍を朗らかに語り、自信と信念を持った演奏家でした。母親の話も聴きたいのに難聴で聴き取れず……残念です。一時間半健常者たちの演奏よりも力強くすごいな……と感動しつつ鑑賞しました。Kさん野菜や木々の勉強。なんていい時間！この勉強は奥が深いので知らないことばかりというのも、うなずけます。庭には白の侘助が今年はたくさん咲いたのですね。彼も椿が好きだったので、椿は固い蕾を花瓶に挿しても美しく咲く開きかけがいいですね。撮って送って下さった写真は来週でしょう。ありがとうございます。

3月18日 遠山さんの墓参会の写真報告、様々な思いで今日読むことができました。加えて夕点

呼時Yさんの補足説明と共に高原さんからの墓参のお礼の文もまた丁度届きました。（墓参後の食事会で、植垣さんを許せない、高原さんの発言と金さんの言い合いになったとか……。遠山さんと面識はありませんが、いろいろなお話を聞いて連合赤軍事件というのは50年近い年月を経ても多くの人の心に癒すことのできない傷を残したということ改めて実感しました。そういう意味で墓参に参列させて頂いてよかったですと思います。」とY

さん）「一月尽殺意無きまま殺したと旧友を語る冗舌憎し」これは私が高原さんの想いを詠んだものです。「革命とサブカル」を1月に興味深く読んだのですが、読みつつ、ふと高原さんが浮かび零れた一首です。

3月19日 昨夜受け取った高原さんの墓参への礼状は心に残りました。高原さんは、感情的に抑えきれない時があります。昨日も、せっかく参加くださった皆様に不快な想いを引き起こしてしまったこと、誠に申し訳なく思っております」と礼状にあり、50年目に、犠牲者全員の親しい人々が一堂に会して故人を偲べば、と願っています。和尚が言い争いを収めたようです。三年後には、山田夫人のT子さんや、できれば加害の側にいた人が深謝する場になれば……と思ったりします。かつて東京拘置所に青砥さんが私に面会した折、第一声が「親友の遠山さんをあんな形で殺し、死なせて誠に申し訳ありません」と深く頭を垂れていたのを思い出します。そんな機会が訪れることをと、思わずにはいられません。橋渡しの役に立つべき高原さんが感情を抑える必要がある時にそうできないと、今回の墓参を実現してくれた和尚能力にとっても、難しいことだと推察します。

3月22日 「監獄人権センター通信」No.97の「空と風と星の詩人～伊東柱（ユンドンジュ）の生涯」（海渡雄一執筆）がとってもいいです。伊の詩と治安維持法で福岡刑に収監され、1944年2月22日獄死したこの人のことは、何度か記事で読んだことがありました。今回は何篇か詩が載っていて、いい詩だなあと心に滲みます。感謝。また、渡邊浩史歌集「赤色」を読んでいます。この人は、秩父蜂起発祥の地で生まれ、秩父困民党総理の田代栄助研究家であり、接骨医院長だそうです。こ

んな歌が好きです。「酒飲めば飲めば淋しくなるばかり耳朶はこんなに冷たいものが」なんだか茶碗酒をゆっくり飲み干していた父の姿を思います。父の、夢破れた人生を思いつつ、こんな歌も。「往く雲は変わらざりしよ千年を敗れ敗れて俺の近代」「ならぬことはならぬとはいえ自由党ラッパ鳴らして辻曲がり行く」「逆縁のかくも非情の盃を干してどうする散りゆく牡丹」また、ゆっくり読みたいです。

3月26日 ラジオJウェーブのニュースで、トランプがシリア領のイスラエル占領地ゴラン高原の、イスラエル主権、つまり占領地併合を認める文書を、訪米中のネタニヤフと話の上で署名したとのこと。「21世紀のバルフォア宣言」です。中東で、占領と民族浄化政策を続ける政治シオニズムが米政権の力で生きのびる限り、戦乱は増殖され続けます。「トランプの「バルフォア宣言」シオニストへ再びアラブの地を与えんと企む」

3月30日 今日はパレスチナの「土地の日」。76年に土地収用に抗議しゼネストしたイスラエルパレスチナ人に対し、イスラエル軍が弾圧・虐殺した日。そしてそれにも拘わらず闘い続けた日です。きつと今みな闘っているでしょう。「ガザ帰還の行進」が去年始まった日ですから、ガザで西岸でゴラン高原でヨルダン、シリア、レバノンの難民キャンプで様々な闘いの姿を示しているでしょう。また今日は檜森さんの命日です。あの日と同じように丁度桜が満開の今年の3・30、十八回忌になるのですね。思い出す姿は若いままの檜森さんです。花は今日のためにように独房で咲いています。「三・三〇春告げる花雪柳チューリップ見つめつ君を弔う」「奪われて追放されて殺されてそれ故益々パレスチナを愛する」

4月2日 新聞を読んでびっくり。選挙狙いか、政権の元号利用、皇室利用の甚だしさに驚くばかりです。ことさらに「極秘」を煽り、指名している「各界有識者9人」や衆参両院の正副議長の意見聴取などと権威付けしつつ「携帯電話もとりにあげる」など、狂乱では？（副議長赤松氏は抗議したらしいのですが。）こういう服従の強制化が「令和」を現しているような気がします。ことさらに「国書由来」を安倍首相は強調していますが、学

者たちも述べているように、時代自身が中国の学習から影響されているのですから、やはりその説は「帰田賦」に典拠があることや、梅は中国の国花で「今回の元号選びは、ふたを開けてみれば、日本の伝統が中国文化によって作られたことを実証したといえる」(小島毅東大教授)や「行政が元号の使用を強制している実態はおかしい。元号法は撤廃してほしいと考えている」(保立道久東大教授)、「国書の強調は日本がGDPも中国にぬかれ、勢いを失ったことの反映のような気がする」(水上雅晴中大教授) などなど。元号を「極秘」強制力で取り仕切って見せて、国家権力を前面に出した政治ショー。未恐ろしい強権を「令和」は帯びて生まれてきたな……というのが私の印象です。「令」は庶民が浮かべるのはやはりまず「命令」の「令」でしょう。元号は皇室が使用してもいいが、公的機関や一般社会では不要です。少なくとも西暦と並記してほしいです。混乱のもとです。

4月5日 送ってくれた治安フォーラム、今年の1月号から4月号まで、感謝。警察関係者が読むのでしょうか。「ジハード主義を読む」保坂修司などもあります。中国、ソ連の諜報・サイバー攻撃の手口の分析、日共の動向(去年10月の中央委報告で、入党者4,355人、日刊赤旗844人増、日曜版6,691人増とか)オウム真理教の分析、去年の右翼活動分析、去年の「過激派の軌跡と今後の展望(過激派問題研究会)」、3月号は外事国際テロ情勢、2018年の「国際テロ」「中国」「北朝鮮」「ロシア」と、それぞれ個人名でなく各「研究会名」の分析記事、また「日本赤軍の動向」という項目があり、5.30 記念日と「テロ」を称賛していること、逃亡中の7人に投降を促さず、支援を継続し



ているとみられること、「こうした姿勢が改められない限り、その危険性は矮小化して評価されるべきではない」とのこと。予算のためか、そうしか言いようがないためか? 解散して18年の組織の亡霊に妄想を持っているのでしょうか。

4月6日 満開の東京の様子がラジオの一言から察せられて、八王子の満開の桜を思い浮かべて花見の週末です。

4月11日 新聞でイスラエル総選挙ネタニヤフのリードと、青と白の野党連合は35議席の同数(定員120)。ネタニヤフ支持の極右らで65議席を占めると予想。ネタニヤフの起訴されるこれからもあり、簡単に西岸入植地併合が進むかは不明です。入植地併合の約束が果たされなければ、右翼が揺さぶりをかけ、不安定化も。でも、ネタニヤフの勝利は、トランプの米支持基盤に有利に作用し、相互に権力の私物化で支え合いは続きそう。

4月16日 巷では「令和」で盛り上がっているのでしょうか。朝日新聞では批判的の記事も載っていますが、イベントや商売やバラエティーで元号を盛り上げているのでしょうか。小島東大教授、当時の良識なら令和は「りょうわ」(大法律令、令旨など)と言うし、万葉集の序の「令」と「和」は、「(令)は月を修飾する語」直接関係なく、とってつけたよう。観梅の宴は「落ちゆく花。縁起が良いと思う人は少ないのでは。「中国古典の『文選』と国書『万葉集』のダブル典拠とすれば、東アジア友好のメッセージも伝わったはず、と述べています。また、万葉学者の東大品田教授は、庶民も詠んだとされる万葉が「天皇や貴族などの一部上層にとどまったというのが現在の通説」「当の本人(詠んだとされる人々)は、万葉歌集の存在自体知る由もなかった」と、近代以降、万葉が愛国に利用されたことを示し、警戒しています。たとえば、「海行かば水漬く屍山行かば草生す屍大君の辺にこそ死なぬ願みはせじ」など、軍国歌謡へ。カコを現在に都合よく偏重する安倍政権の姿ははっきりしています。私は伝統や歌を否定するものではありません。万葉集をこじつけて押し付けようとする姿勢を警戒したいと思います。“狭量さ晒すが如く新元号国書国書と宣いており”と思わず尋

れます。

4月19日 「救援」結成から50年の総会「時代を画す関西生コン弾圧の現状」報告など。激しい国家権力の挑発的な拘束の数々・強権がまかり通っていますね。「テント日誌」ありがとう。途中でこちらに届くルートの停滞からか2月から4月まで一緒に届きました。「テントの闘い」を代表していた洲上さんの様子、ご逝去まで遅れて読みました。

4月21日 昨夜半、久しぶりに煌々と輝く月を見つけました。十六夜の月です。やっと見つけました。“煌々と十六夜の月にみつめられ密かな憤怒も溶けてゆくらし”

4月28日 今日は4・28 闘争、沖縄が思われる日。夕方和尚の電報届きました。面会の予定知らせてくれました。5月16日です。5月15日はパレスチナのナクバの日。パレスチナのために法要したいと思います。和尚の送ってくれた東京新聞のコピーはいつも面白い。今回はパンタさんの頭脳警察50周年記念コンサートが7日あの新宿の花園神社の野外テント劇場で行われたとのこと! 赤軍派結成と同じ年なのですね。「パンタ」という芸名はひょっとしてヘラクレスの「万物流転」(パンタ・レイ)という言葉と関係があるのかと執筆者はロッカーとして変幻自在に生きているパンタさんを記しています。「その政治的過激さは一貫しており、日本の芸能界では希有。怒ることはたやすいが、半世紀にわたって怒る続けることは難しい。頭脳警察はそれを実践した。」と賛辞の文です。そうか……パンタさんも芸能界?! そういう風に捉えていなかったのを自覚。パンタさんの怒りは優しさと表裏なのですね。現実があまりにも不公平だから何故?! と根源的に問い続けるパンタは変革者であり続けているのだと思います。祝50年のコンサート、知っていたら花束を贈りたかった! 残念……でも祝50周年!

5月1日 メーデーは遠く、退位・即位で新聞は埋められています。安倍首相はここぞと大活躍の政治利用が続いています。

5月3日 憲法記念日を前にした世論調査。朝日

新聞では「改憲機運は高まっていない」が72%、9条変えない方が良いが64%(去年63%)、変える方が良いが28%(同32%)と変えない選択が圧倒的。9条安倍提案の自衛隊明記改正反対48%賛成42%とのこと。同じ日の読売の世論調査では、象徴天皇制維持賛成78%、憲法議論の活発化を望むのが65%、改憲する方が良い50%(前年51%)、しない方が良い46%(同46%)、自民の9条自衛隊明記賛成47%、反対46%とのこと。単純比較は出来ませんが読売読者でも改憲の方が少し減った様です。民意は「9条改憲への疑義」でしょう。朝日で憲法学者の樋口陽一さんが、自衛隊の「書き加え」は9条を失う恐れがある。「大きな変更にならない」とする考え方に対し「法的な意味について理解が足りないと感じますね。基本的な法原則の一つに『後の法は先の法を破る』があります。ある法規にそれまでと違うことを書き加えたら、前のルールは失効するか、意味を変えるという原則です。」と述べて、そのまま自衛隊の存在を書き足すと、戦争放棄をうたった1項と、戦力不保持の2項が場合によっては失効するという恐れがあると言うのです。樋口さんは賛成ではないが、きちんとした政治主張ならば「たとえば専守防衛を原則として集団自衛権の行使には厳格な制限をかけた自衛隊を明示する必要」を述べ、現在の改憲論は「フェイクのレベル」と述べています。安倍とその周辺の旗降る改憲は挫折すると看破しています。公共社会の共通の枠組みで築き上げていくといった文明社会の約束事をあまりに軽んじる政治家たちだからです。と述べています。法原則をこの憲法の日の一つ学びました。

5月8日 パレスチナでは5月を迎えて激しい攻防と緊張が続いています。占領者イスラエルが圧倒的な軍事力でパレスチナ人を蹂躪していることと、被占領者たちの抵抗運動を「喧嘩両成敗」や「ハマースのテロ」とする米欧メデアパイナスのかかった主張で、いつもイスラエルが免罪されて何十年たったことか……と、改めて思う5月です。朝日新聞の論調と読売新聞を較べて読んでみると、扱い方、事実の捉え方、読売の方がより頻繁で正確です。朝日はエルサレム支局の視点が基調で、イスラエル側主張の紹介が多いと思います。これからナクバの日も迫り、5月は更にパレスチナを注視し続けたいと思います。アラブも代替わ

り、私たちの知る友人・知人が少なくなって、若い人々が最前線を担っています。

5月10日 丁度「月光」58号の特集で、坪野哲久の歌を味わっているところでした。1928年に「無産者歌人連盟」後の「プロレタリア歌人同盟」を結成した人の一人です。何度も獄中に追いやられつつ、闘い続けた人。渡辺政之輔、山本宣治の追悼集会での「渡政の闘志かがやく祭壇の赤旗よ！もつとひるがえれ」「どうしても泣けてくるのだ山宣の死面（デスマスク）が今日掲げられた」の歌や、「チンボコがぐっしょり濡れて雨の中に地ほり穴ほりぶっ通した鉄管」「お前になんか腕づくだって負けやしねえがおれらには命の使いどころがあるんだい」など、若い時の歌。同じころ「曼殊沙華のするどき像（かたち）夢に見しうちくだかれて秋ゆきぬべき」（1940年）など。1988年、死の前にはこんな一首も。「核と癌あ文明の貌（かお）としてかがやきおびえて世紀末くる」この人の生き方も敬しますが、この夫人、同志で歌人の山田あきの方がもっと好きです。「連翹の花にとどろくむなぞこに浄く不断のわが泉あり」「みずからの選択重し貧病苦弾圧苦などわが財として」「被爆者の現身（うつしみ）のあぶら石を灼きそを撫でしわれ永遠のつみびと」などなど。短歌はいいなあ、刺激を受けつつ思います。哲久らの歌が求められる時代だと、今、こんな歌も。「われ一生に殺なく盗なくありしこと忿怒のごとしこの悔恨は」哲久の心意気。

もう中東はラマダン（断食月）です。明日金曜日（ラマダンの最初の祈りの金曜日）ですが、イスラエルの不当な仕打ちが予測されます。「ガザでは生きていくことを毎日祝うの」と、かつてメイが言った言葉が思い出されます。ナクバの71年目を

迎える5月です。「パレスチナ祖国へ帰る自由さえ奪われ殺され71年」「月光」の歌人たちに刺激されて、このパレスチナの5月、私も詠んでみました。

パレスチナ——ナクバの記憶

オリブの種で作りし数珠手繰り
ナクバの日々を共は語りぬ
真夜に扉叩き壊され銃口が
火を噴き母と兄は倒れし
母の骸だんだん冷えゆくその下で
隠れし六歳われ生きのびて来し
凝固する母の血の胸に^{はしひゃつか}罌粟白花
置きて弔い別れし五月
死も知らず母の乳房にしがみつく
蠅にまみれし赤子が泣いてる
手に二人三人目の背の子の袖噛みて
必死に川を渡る親見し
若きは見知らぬ老婆をかわるがわる
背負い逃れしナクバの五月
虐殺と飢餓と酷暑の地獄の道
その時の友は今も親友
ナクバの日々北へ北へと追いたてられ
オリブ畑も果樹園も盗られ
パレスチナ怒り哀しみ切歯扼腕
犠牲厭わずフェダイーン（戦士）となる
アシュバルの子等の目輝き我らみな
フェダイーンになると胸を張りたり
おみならは祖国へ帰ると旗掲げ
占領軍の銃口に向かう
占領軍と占領された者並べて喧嘩
両成敗は欺瞞に過ぎぬ
世界から帰還の権利見捨てられつ
不条理許さぬパレスチナの友ら
硝煙と朝霧越えて敵陣へ

オリオン星となりし友らは
などなど、ナクバのことを話してくれた情景を浮かべて詠むと、洗練されない直情が溢れてしまいます。

5月15日 今日は米統治の沖縄が、72年日本の統治下に入ったはずの日。国土の0.6%の沖縄は、日本に復帰後、日本本土の反基地闘争が力及ばず、沖縄の基地の集中を許し、今でも米軍基地施設の7割が沖縄に。「普天間の危険」を口実とする辺野



古沿岸移転は、更に民意を排除して続けられる不条理です。県民総所得に占める軍関係所得の割合は、5%程度。基地のない、アジアのセンターとしての観光立県は、日本にとっても国益のはずです。基地撤去と日米安保の解消も、21世紀半ばには実現されねば...と思いつつ。一方又、71年前にはイスラエルが5月14日に建国し、それを知ったこの日、5月15日は、パレスチナにとってのナクバの日です。今、ラマダン中。ナクバの状態のまま「帰還の権利」を奪われたパレスチナ人民の闘いは、米欧植民地支配の先兵として登場したシオニスト国家に対する闘いは、21世紀勝まで続くでしょう。「勝つ」とは政治シオニズムを脱したパレスチナ人、イスラエル人の民主主義な社会を基盤とした国とすることです。

パレスチナ問題の専門家、JSR ニュースを配信しておられた奈良本さんが、米国の新中東和平案について、次のように記しています。「アメリカの新『中東和平』は、凄まじい内容です。Israel Hayom にリークされたものが以下に紹介されています」として、要点は、①イスラエルは西岸地区の全入植地を併合②非武装化されたパレスチナ国家③パレスチナ側が拒否すれば、PA（パレスチナ自治政府）へのすべての資金援助を停止、いかなる国からの援助も阻止④もしPLOが受諾して、

ハマースが拒否すれば、イスラエルによるハマースとジハード（イスラーム聖戦機構）のメンバーに対するイスラエルの暗殺作戦を支持⑤エルサレムは、イスラエル、パレスチナ共通の首都、など」とのこと。

イスラエルのネタニヤフとトランプの作り出す「中東和平案」は「現状の合法化」、つまり占領地の入植地や戦略陣地の西岸地区をイスラエルが67年の第三次中東戦争以来手離していないのですが、それをイスラエルに併合し、「帰還の権利」を抹消させ、エルサレムはイスラエルの首都として、アラブや国際社会に認めさせること。残りにパレスチナ「国」と国の名を与え、財力と軍事力でパレスチナを黙らせようとする魂胆。パレスチナは今こそ脱シオニズムの民主化—イスラエルもパレスチナも—の長期持久戦略で立ち向かう時です。パレスチナからオスロ合意を脱した闘いこそ！と念じています。なぜなら、すでに実質併合下にあり、トランプやネタニヤフの任期の先を見据えた解放戦略として、イスラエル人もパレスチナ人も問われるからです。パレスチナの今の抵抗戦はまた、「反イラン戦略」でイスラエルと組もうとするサウジらの力を押し止める力となるはず。厳しい闘いのパレスチナに、そして日本の沖縄に連帯！パレスチナに沖縄に連帯する5月です。

読んだ本

重信 房子

役重善洋著の「近代日本の植民地主義とジェンタイル・シオニズム」という本を読みました。「内村鑑三・矢内原忠雄・中田重治におけるナショナリズムと世界認識」という副題のこの本が、今年3月にインパクション出版会から刊行されました。この本に対する私の興味と問題意識はジェンタイル・シオニズムが、どのように歴史的に形成されたのか。そしてキリスト教徒の日本のリーダーたちが、それにどう関わったのかという点で、それらを学びたいと思いました。

この本が学術的研究論文を改めたものでありながら読み易いのは、著者が序論において、読者に基本的用語概念を説明し、ジェンタイル・シオニズムに対する視点を提供しているからでしょう。そして「第一章」において、ジェンタイル・シオニズムとその海外ミッションの歴史的背景と、その時代の問題を述べ、その上で、「第二章」では内

村鑑三の「再臨信仰」からシオニズムを支持した宗教と民族観を分析しています。「第三章」では、矢内原忠雄の信仰と植民地政策について分析し、彼が英統治下のパレスチナに行き、社会主義シオニズムに共鳴し、そこから移住植民地主義の満州移民政策を重視したことがみてとれます。「第四章」では、1928年、英統治下のパレスチナで開催された、国際宣教協議会（IMC）について記しています。IMCが50カ国、250人の代表を集めながら（日本・朝鮮含む）、実情としては、欧米クリスチャンの帝国主義植民地政策や反共政策と伴走するものであり、パレスチナに住むクリスチャンやムスリムは、この会議を帝国主義の宗教政策であるとして、抗議が続いたことが示されています。「第五章」では、ホーリネス教会の中田重治の信仰と行動をとりあげ、知識人というよりも戦闘的大衆のリーダーである彼が、満州で特務機関と

共同して進めた、移住植民地政策を語っています。それらをふまえ、「結論」として、再度概括してジェンタイル・シオニズムについて述べています。

著者は、まず序論で「ジェンタイル・シオニズム」を説明しています。「ジェンタイル」とは、旧約聖書や新約聖書に多く出てくる「非ユダヤ人」を意味する言葉であり、聖書では「異邦人」と訳されることが多いと述べています。欧米の保守的プロテスタントの間でみられた「終末信仰」において、ユダヤ人のパレスチナへの「帰還」を、キリスト再臨の予兆と見なす考えに由来しています。この考え方は、人為的にユダヤ人の「帰還」を促し、キリスト再臨を早める考えにもつながっていくのでしょ。こうした考えは、ユダヤ教の律法に反したあり方ですが、宗教改革期にはじまり、19世紀以降、ユダヤ人自身が20世紀末にシオニズム運動を始めてからは、非ユダヤ人によるシオニズムという意味で「ジェンタイル・シオニズム」という用語で呼ばれ、盛んになっていたそうです。

この保守的キリスト教プロテスタントの潮流は、1980年代以降、米では福音主義者と呼ばれる、反知性主義ともいえるイスラエル支持の流れを作り出しています。著者は、この本がイスラエル建国以前の考察であるので、その当時、一般的に用いられた「ジェンタイル・シオニズム」という用語を用いる、と断りを入れています。「ジェンタイル・シオニズム」は西欧近代化の中で、国家体制が作られていき、これまでプロテスタントの国で、差別と排除の対象であったユダヤ教徒に対する、新しい聖書解釈として現れたようです。宗教改革以降、旧約聖書に書かれた「イスラエル」に新たな主権国家のイメージが付与され、自国こそ「イスラエル」だとする世界のキリスト教化の使命が盛んになります。この自国主権国家の「外国人」



ぶきとう

として、ユダヤ教徒を位置付け直し、キリスト教への集団改宗か、パレスチナへの移住（帰還）を促すことが、世界のキリスト教化の完成（終末）を導くとする考えが現れ、プロテスタントへのユダヤ教徒の改宗とセットになって生まれたのが「帰還論」です。

「千年王国論」は、人類の歴史の終末において、イエス・キリストが統治する「千年王国」が現れるという考え方で、原始キリスト教以来、度々唱えられた終末思想ですが、宗教改革以来、それが更に強く唱えられるようになりました。でも、この「千年王国論」は、最終的にユダヤ人が、イエスをメシアとして受け入れたとしても、それは、他のキリスト教とは役割を異にする「ユダヤ人キリスト教」として、改宗しても「ユダヤ人」は、こんどは人種的概念として扱われ、区別されることを意味しています。

この点について著者は「第一に、ジェンタイル・シオニズムがユダヤ教徒（人）を常に『よそ者』として扱ってきた欧米キリスト教社会の差別的ユダヤ人観の上に成立していること。第二に、本来キリスト教世界の一部であった聖地パレスチナをムスリムが占領しているとする反イスラーム歴史観を前提としていること。第三に、旧約聖書の古代ユダヤ王国を自国に重ね合わせるという、英米等のプロテスタント国に顕著な『国民史観』を土台として受容されてきたこと」を指摘しています。ピューリタン革命を経て米欧両国にこのジェンタイル・シオニズムは広がり、18世紀以降の英米植民地主義を支えるイデオロギーとなり、海外ミッションナリーとして宗教的・政治的に利用されます。そしてユダヤ人のシオニズム運動が起きると、ジェンタイル・シオニズムの政治的達成として1917年「バルフォア宣言」へと進みます。読んでいくと「ジェンタイル・シオニズム」福音主義派の根深さを改めて知り、個々の伝道者の善意の活動も含めて侵略のバックボーン思想となり、ユダヤ人や被抑圧民族への侵略や差別が宗教・信仰として肯定されていく様子が詳しく判ります。「バルフォア宣言」自身「ユダヤ人を救う」としつつ、ジェンタイル・シオニストの恩恵があり、それはまた当時の民族自決などのウィルソン原則に反する侵略・植民地支配を英帝国主義が「委任統治」という形の隠れ蓑によってユダヤ人を先兵にアラブ支配を企んだことにつながっています。

こうしたプロテスタントの中にあるジェンタイル・シオニズムは日本の近代化の中で、文明化とキリスト教信仰が一体に流入した時代でも特別な位置にあったようです。著者の主眼はこうした日本のキリスト教にとつてのナショナリズムがどうジェンタイル・シオニズムを受容していったのか、これまで日本で研究されてこなかった点を詳しく研究した成果として記しています。「文明開花」で諸手をあげて日本に受け入れた「欧米」が、時を経て日本自身が侵略国家化していくと共に、キリスト教徒がどのようにそれに立ち向かい、あるいは共存、先兵となっていったのを明かしています。

内村鑑三も天皇制ナショナリズムが強化されていく中で「一高不敬事件」を起こしたように、日本の軍国主義とキリスト教的使命の統一をどう作り出していくか葛藤していくのです。著者が本の中で3人の日本人を取り上げる理由は、差異はあるが彼らの「ユダヤ人と神」の関係の捉え方にあります。プロテスタントが自国を旧約聖書の「イスラエル」に重ね合わせて、そこに「神の国」を実現することを目指すように3人が現代日本にそれをあてはめる聖書解釈を徹底させる立場から、キリスト再臨運動について熱心に活動していたリーダー達であったからです。他の日本の主流プロテスタント指導者が宗教と政治の領域を分離して、信仰を内面の問題とすることで天皇制イデオロギーに折り合いをつけて対応しようとしたのに対し、信仰と政治を一体のものとして捉える分、西洋の学問や技術の根底にあるキリスト教思想による優れた「神の国日本」を作ろうともがくのです。シオニズム運動をキリスト再臨の予兆であると評価する欧米中心史観のままに、ナショナリズムを位置付けることによって天皇制イデオロギー自身のもつ宗教ナショナリズムと不断に原理的矛盾をきたし、統制・抑圧されその解決として日本の侵略植民地主義に結局組み込まれ、その上弾圧もされていったことが示されています。

内村は第一次大戦後のウィルソン大統領の原則に日本のキリスト教の調和を求めつつ、キリスト教と民族の問題を解決できず、シオニズムがパレスチナ人の抑圧を無視したように、朝鮮独立運動に対して「民族融和」をもとめ、それらは戦後東大総長となる矢内原の満州植民政策肯定につながっていきます。当時1922年反シオニズム蜂起の

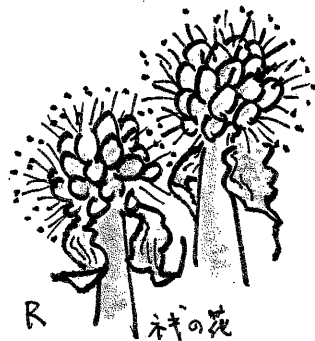
中パレスチナを訪問した矢内原は社会主義シオニズムの植民政策に感動して、満州へとクリスチャンの夢を描くのです。満州への布教と植民として邁進することで国内天皇制イデオロギーによる治安維持法の弾圧に悩みつつ、日本の植民地支配と連動していきます。中田は「神社不参拝」の主張を貫くために、結局キリスト教の積極的戦争協力が必要と考え、対米戦を避け西方戦線拡大へと満州伝道を中心に日本特務機関に貢献します。しかし日本の戦争政策がナチス同様の対ユダヤ人政策へと変更する中で混迷しつつも、中田が39年に死亡すると、共にあった賀川豊彦らが引き継ぎつつ進めます。賀川は戦後もその反省の総括は示されなかったようです。クリスチャンとして、日本の治安特務機関に弾圧されたことで、当時を相殺することはできないでしょう。この満州キリスト教開拓村の共同者として、内村の弟子や日本の代表的な「イスラエルロビー」となる手島郁郎も加わっています。手島は戦後「キリストの幕屋」という組織を立ち上げ、70年代のイスラエル・モサドらのパレスチナ弾圧の協力主体の一つとして「幕屋」はPLOでも当時知られた存在でした。欧米のキリスト教信仰から生まれたジェンタイル・シオニズムの侵略思想はユダヤ人のシオニズムと不可分な関係にあり、パレスチナ・アラブの人々への支配抑圧を正当化しました。しかし、パレスチナではキリスト教徒は民族的アイデンティティと宗教観を統一しつつこの侵略思想にキリスト教を抵抗の思想として闘い続けたのです。日本においては、パレスチナや朝鮮・中国人民のキリスト教徒と違って、ジェンタイル・シオニストが日本の侵略、アジア支配を受容していったことに、日本のキリスト教徒としての主体性のあり方が浮かび上がってきます。この「ジェンタイル・シオニズム」の古くて新しい侵略思想が米トランプ大統領、ペンス副大統領らを支える政治的・人的基盤である現在、この本の出版の意義は大きいものだ改めて思います。（2018年10月31日記）

「アラブ革命の遺産」（長沢栄治著・平凡社刊）を読みました。初めて読んだのは、2016年です。この頃は、2011年に始まったアラブ民衆蜂起が打ち砕かれ、米欧と同盟するサウジアカタールのア

アラブ王制国家が煽動する宗派戦争が席卷し「イスラーム国 (IS)」を生み、それに驚いた米欧・アラブ王政軍が激しく空爆して IS を破壊・追いつめていた時でした。

この「アラブ革命の遺産—エジプトのユダヤ系マルクス主義とシオニズム」と題する著作は、2012年3月に発刊されていて、丁度まだエジプト民衆革命の勢いのある時に執筆されているものです。この種の研究書には見られない熱い人間的洞察と心情に溢れていて、大変感動しつつ読みました。これは著者の人柄によるところが大きいかもしれません。帯に「終わりになきサウラのために」(サウラは革命の意)と記されています。

エジプトで共産主義者として革命を求めた多くの人々が王制下で、またナセルの民族革命政権下で、どのように闘い弾圧されたのか、そしてその革命の遺産が、どのようにこの新しい民衆蜂起に活かされるのか。それとも、かつてのような激しい弾圧の辛苦を背負うのか、時代の要請に応えるように執筆されています。「アラブ革命の遺産」として、歴史を俯瞰し1940年代・50年代を闘った、エジプト共産主義運動と、そのリーダーとして闘ったユダヤ教徒出身のエジプト人を中心に捉え返しているのがこの本です。「祖国を追われ世界を祖国として闘った」といわれるインターナショナルのヘンリー・クリエル (1914~1978) と、ユダヤ教からイスラーム教に改宗しつつ闘った共産主義運動の理論的リーダー、アハammad・サディク・サアド (1919~1988) の二人の闘い、生活、証言に焦点を当て、著者がエジプト知識人・革命家たちと思想的対話と交流を果たしながら書き上げたのがこの書です。この本は600ページに及ぶ大部なものです。革命家たちの息吹が伝わるような、その闘いの矛盾・対立・葛藤・獄中での姿



など、克明に明かしながら、著者もまたその中で呻吟を共にしつつ書いているように思える本です。

この本の主旨やポイントは、著者によって「アラブ革命が始まってから一年が過ぎた」という書き出しで始まる「まえがき」で、判りやすく示しています。その中で著者は、2011年に始まる民衆革命は、歴史的に半世紀以上前の、1952年、ナセルらの七月革命に始まる変革と、アラブ民族革命の遺産が引き継がれていると捉え、当時実現しえなかった志が今も闘い継がれており、それをアラブ革命の遺産として捉え直すことを自らに課した作業として執筆していることがわかります。

1952年、エジプト革命に始まる植民地支配からの解放と、人間の尊厳と権利を求める闘いがアラブ中を覆い、世界に影響を与えつつ、また、影響を受けながらアラブ民族主義革命が進んだ時代です。こうした革命の時代、若者たちは一人ひとりはどう生きたのか? 1940年代から活躍した人々と時代を掘り起こし、再現しつつ記しています。エジプト共産主義運動のリーダーであるヘンリー・クリエルとアハammad・サディク・サアドの歴史は、エジプトの革命の遺産の実情を示しています。クリエルは1943年、エジプト共産主義運動、民族解放民主運動 (DMNL) を創設し、サアドはそのライバルの組織「新しい夜明け派」の指導部に属する理論家ですが、二人のユダヤ人指導者は、パレスチナ問題で正反対の立場に立つこととなります。

1947年11月、国連総会のパレスチナ分割決議にソ連が賛成するという、アラブの共産党・共産主義者たちにとって衝撃的なことが起こります。サアドは、アラブ民族主義者同様、分割決議に賛成したソ連に、共産主義者として異議を唱えます。そしてのちにも、ソ連や「外国人 (移民してきたユダヤ人など)」の共産主義運動の様々な軋轢の中で、「運動のエジプト化」に尽力していきます。

また、パレスチナの英植民地経済・社会を分析しつつ、反シオニズム・反英を貫きます。一方、クリエルは分割決議を支持する DMNL 路線を創出し、反対を主張する同志と党内矛盾対立に至りつつ闘います。このクリエルの分割案支持は、ソ連への追従というより、シオニズムに対するユダヤ人クリエルの親和性を疑った同志たちによって、1958年3月 DMNL から絶縁を宣言されます。クリエルは、その当時既に1950年7月にファル

ーク王政によって、エジプト国籍を持ちながら「外国人」として国外追放されて、パリでの活動を強いられた中で、同志たちの絶縁という苦境に出会ったのです。クリエルがユダヤ人であり、国外に在って追放の身で指導しようとしたことが反発を生んだ、といえます。クリエルはその後「連隊」という組織を立ち上げて、アルジェリア独立戦争を支持して投獄されながら、南アの反アパルトヘイトの闘いなど、第三世界解放運動に尽力し、1978年6月、パリで暗殺されます。この本の中で、それらが詳細に多様な角度から記されています。

第一部は「アハammad・サディク・サアド論」、第二部は「ヘンリー・クリエルとエジプト共産主義運動」、第三部では「エジプト共産主義運動におけるユダヤ教徒問題」、第四部は「パレスチナ問題とエジプト共産主義運動」、第五部は「アラブ民族革命の時代を生きる」として、「はじめに」の中で概括しています。この第五部は補論的部分と断りながら、二人の革命家について触れています。エジプト・シリアのアラブ連合共和国時代 (特に1958年)、激しい反共弾圧の拷問に殺された、誠実なレバノン共産党リーダーのファラジュッラー・ヘルウを蘇らせています。この本の中で、それは、シリア・レバノン共産党書記長として、40年も君臨し、「ミニスターリン」といわれたハーレド・バクダーシュの正体を露わにし、対比しながら、ヘルウの殉難の様子を哀悼をもって伝えています。また、友人でもあるムスタファー・ティバ (元クリエルの同志で1952年から1964年、フルシチョフの訪エジプトまで獄にあり、闘い続けた革命家) との出会い・交流の中で著者が教えられた様子が率直に記されていて、補論部分はアラブ民族主義政権の強権・拷問・弾圧の中で、革命家たちがどう闘ったのか、学ぶことができます。

とくにナセル政権の評価をめぐって、結局、ソ連の国家外交政策に犠牲を強いられ、解体していた党 (1965年3月、ナセル政権支持で、エジプト共産党は自主解放宣言をする) に、共産主義者の矜持をもって闘い続けた革命家の友人、ティバの姿を熱い共感で描いています。1960年代、日本の私たちは唯闘いの突出に力を注ぎ、市民・人民と共に闘えなかった革命をふり返りつつ読みました。

この本に私がとりわけ深い関心を抱いたのは、

海外の私たちの1974年、闘いの中で交差したアンリ・クリエルについて、その生い立ちや、共産主義者としてのエジプト時代を深く知ることができたためでもあります。クリエルは、何故あの時パレスチナ解放闘争支援を他の第三世界への尽力と比べて、躊躇したのか? 当時の疑問が、この本を読んで納得できるようになりました。

アンリ・クリエルは、初期のエジプト共産党を創ったユダヤ人であることを、1974年、私たちが彼らと出会った頃から知っていました。彼らの組織「連帯」はその多くを地下組織化して第三世界の解放闘争を支持していました。当時の第三世界の解放闘争は常に暗殺に晒されるなど厳しい中にあり、彼らの兵站を支えるためにはそうせざるをえなかったのです。クリエル本人もファルーク王政から外国人として追放されながら、そしてアルジェリア解放闘争を支持してパリで投獄されながら、ひるまず南アやアフリカの闘いもまた支えていました。私たちと接触するようになった折「連帯」は欧州では自国政府打倒の闘いは行わない、支持しないことが第三世界革命支援のために必要なことであり、欧州の武装グループには協力しないという立場を明確にしていました。その上でパレスチナ解放の武装闘争にはコミットしない、これまでしてこなかったという立場を取っていました。「第三世界革命支援」と言いつつ、なぜパレスチナ解放闘争は支援しないのか? ユダヤ人との対立にはモサドが介入し、仏・欧州での活動に支障が出るという風には理解していました。PFLPの国際遊撃戦には共闘しませんでした。結局私たちにに対しては国際主義の立場からいくつかの兵站的な支援をしてくれました。

しかし74年に私たちの活動の過ちから、いわゆる「パリ事件」といわれる日本人・外国人の大量逮捕に至り、クリエルの仲間にも小さくない被害を与えたばかりか、クリエルが「テロリストの親玉だ」とか「KGBの手先だ」といった大キャンペーンに晒される結果をもたらしました。私たちは政治的にもまた技術的にもあまりに未熟でした。クリエルらはユダヤ人・イスラエル人とPLOらパレスチナ人の政治対話の回路をML主義者こそ開くべきだと考えていたと思います。当時の情勢もまた私たちが議論を受けとめうる程成熟していませんでした。その後すっかり厳しくなった条件の中「連帯」は活動を続け、78年5月4日ク

リエルは自宅アパートのエレベーターから玄関ホールへ降りたところで2人組の男たちによって射殺されました。誰がクリエルを殺したのか？ モサド、仏右派の秘密軍事組織OAS、さらにはアブニダールによる殺害まで、当時衝撃的に犯人像が語られました。私はアブニダールに直接聴き、彼らではないと理解しました。それにアブニダール派は暗殺を誇示し隠したりはしません。モサドの仕業だろうと考えました。私たちの失敗、あやまちのためにクリエルらを危険に晒してしまった結果、クリエルの死を招いた責任の一端を負っていると反省して、友人組織を通して追悼を伝えました。今回この本によってクリエルの個人史を読み（当時のエジプトの億万長者のファミリーのユダヤ人子弟は私の学校に通い、生活も仏人的でアラビア語も不十分で「外国人」という実体だったのも知りました）祖国を追われたスファルディのユダヤ教徒の彼が、ユダヤ人共産主義者として組織したパレスチナとイスラエルの民衆の側の対話が、モサドのクリエル林殺につながったのだらうと改めてその思いを強くしています。革命を担う人々の人間的側面を革命の遺産として伝える希有な良書としてこの「アラブ革命の遺産」を再読しています。（2018年12月6日記）

岡真理著「ガザに地下鉄が走る日」を読みました。この本はイスラエルにとって武装作戦で攻撃されるより脅威に達しない、と思いつつ読みました。パレスチナの西岸地区やガザでイスラエル軍によってパレスチナ人が銃弾や空爆で殺されるニュースは日本でも時々伝えられます。でも日本に住む人々にとっては同情を寄せても遠い存在でしかありません。この「時々伝えられる」パレスチナとは、どんな現実なのか？人々はどう暮らしているのか？実は「時々」ではなく、日常生活のすべてイスラエルの欺瞞的で野蛮な介入と弾圧の中にあること、その数々の姿……。それらを一人の研究者として思索しつつ、旺盛な好奇心を持つパレスチナ人の伴走者としてすごした日々の行動の記録が凝縮されているのがこの本です。

著者から読者に提供される経験と思索の数々は、共感を与えずにはおかない筆致で描かれています。どの章も20代だった著者が新しい社会・現実に

直面しながら思索し、問題意識を組み立て、更にパレスチナ問題を解明していく40年近い思索の過程がパレスチナの現場の人々との対話と協力を通して生まれる姿が浮かびます。人々に語りかけ鋭く学ぶ姿勢に私は感動すると同時に、自分をふりかえります。私は解放運動の闘いの側、解放組織の側からしか見えなかったことを読み取ることが出来るからです。著者がアラブ・パレスチナの人々と出会い共感し連帯しながら研究提示している記録を私は追体験的に想像しつつ当時を思い、その地名、サブラ・シャティーラ難民キャンプ、ラシーディーエ難民キャンプ、タッル・エルザアタル難民キャンプ、そしてパレスチナ人がよく語る「ワタン」「ヘルウ・フィラスティーン！（すばらしいパレスチナ！）」や言葉に感情移入して胸に郷愁のように熱く迫り、情景が広がります。

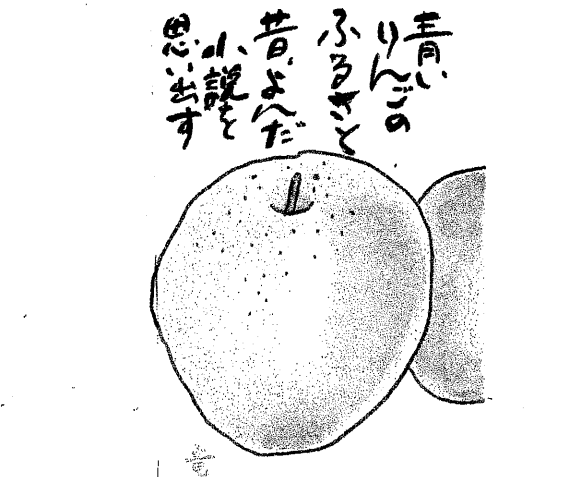
第一章から第十四章のうちどの章もいいものです。第二章のガッサン・カナファーニの「太陽の男たち」。第三章「ノーマンの骨」と題されたイスラエルによるナクバ（大破局）虐殺の真実。第四章「存在の耐えられない軽さ」に記された、イスラエルの10年以上の完全封鎖の下「生きながらの死」におかれたガザの人々の告発。第五章「ゲルニカ」が語るサブラ・シャティーラの82年の虐殺、それらは過去ではなく、著者の筆で今につながる日常性として活写されます。また祖国パレスチナに帰ることの出来ないレバノンのパレスチナ人が、著者がパレスチナ、エルサレムにも最近行ったことを知り、思わず声を揃えて「ヘルウ・フィラスティーン？」と聴く第九章の情景。第十二章では「人間性の臨界」と題して、2008年から9年にかけてイスラエルがガザでいかにパレスチナ人を虐殺したのか、この空爆と虐殺に抗して雨の中日本でも扇町公園から約500人の抗議とデモのあったこと、きりなく記したいエピソードにあふれています。どの章も心に響きますが、第一章、第二章そして最終章についてふれておきます。

第一章「砂漠の辺獄」の中で著者は自らの経験から思索を開始します。著者が22才の夏トルコ・シリア国境を通過した時、陸続きの国境の間にはどちらの国民国家にも属さない「ノーマンズランド（緩衝地帯）」があることをはじめて知ります。この経験は2000年の米軍イラク侵略の戦禍を逃れるためにヨルダンへと向かったパレスチナ人が、他の国籍のある人々と違って、ヨルダン入国を拒

否されてノーマンズランドに留め置かれ、難民と化していた衝撃の事実と向き合うこととなります。また、イラクからシリアに逃れ同様の境遇に遭うパレスチナ人。更にはシリア内戦の中、レバノン、ヨルダン、トルコの国境地帯ノーマンズランドに滞るしかない人々、欧州へと難民化をもとめ海の藻屑となる人々……。人間としての扱いを拒まれた「ノーマン」……。主権を基礎とする「国民国家」の空隙に落ち込んだ人々を著者は凝視する。「彼らは人権とも、彼らを守る法とも無縁だ。『法

も『人権』も、それは『人間』、すなわち『国民』の特権なのだということ。国民でないものは『人間』ではない、それが、普遍的な人権を謳うこの世界が遂行的に表明している紛うことなき事実であり、その事実が——彼らが『国民』でないために『人間』でないという事実、それゆえに人権や人間を護るべき法の埒外存在であるという事実が——露わになるのが、ここノーマンズランドだ。」もつとも必要とする人々に人権が与えられず、自らの力では越えられない国と国との間に棄ておかれた砂漠の辺獄。「人間と市民の同一性、生まれと国籍の同一性を破断する」難民という人々の住む穿たれた穴の暗黙の虚構の上にこの世界があると著者は見据える。そこから著者は「パレスチナを思考することは、ノーマンとともにこの砂漠の辺獄から世界を思考するというに他ならない。」という視座を得て、国民国家の狭間で生きることを強いられた「ノーマン」の現実をパレスチナの重層的姿としてその視座のもとに最終章の第十四章「ガザに地下鉄が走る日」まで記録しています。

第二章「太陽の男たち」では、ガッサン・カナファーニの小説「太陽の男たち」が「国境と難民」について思考するうえで、二十一世紀の今日的問題を既に半世紀以上も前に記したものとして、改めて読まれるべき作品として紹介しています。世界に問題が溢れるとうの昔に、パレスチナの現実がそこに始まっていたことを示しています。この小説を簡単にスケッチすると、イスラエルの民族浄化作戦によって48年パレスチナを追放された3人の男たちの10年目の物語。働き口も無く、パスポートもビザもない3人がクウェートへと職を求めて密入国を試み果たせず、死を迎えノーマンズランドにうち棄てられていく物語です。クワ



エート密入国の手段は灼熱の50度にもなるイラクのバスラからクウェートへの空の給水タンクの内に潜んで、国境を通過することです。この運搬を金稼ぎに諒解する運転手もまたパレスチナ人です。イラク国境は越えたのですが、クウェートの検問所でひまつぶしの係員たちのくだらない話の相手をさせられながら、運転手はジリジリしながら入国手続を終えるや、大急ぎで車をノーマンズランドに移動して停車し、タンクの蓋を開けたが、すでに3人は事切れていました。灼熱の7分の辛抱のはずが20分以上を過ぎてしまったのです。運転手は「なぜおまえたちはタンクの壁を叩かなかったんだ。なぜ叫び声をあげなかったんだ。なぜだ。なぜだ。なぜだ。」と繰り返すのです。この悲鳴で物語は終わります。ここに、作者ガッサンの思いが込められています。

その後、エジプト人のタウフィーク・サーレフ監督によって「欺かれし者たち」のタイトルで、この小説が映画になりました。映画の方は、灼熱地獄のタンクの中で、3人は必死にタンクを叩くのです。でも声は届かず、結局絶命し、原作と同じく、骸はノーマンズランドに棄てられます。今回この著書を読みつつ私は、昔のある光景を思い返しました。あれは、71年の12月の終わりか正月72年の冬、私は26歳のころのことです。当時の私は、ボランティアでPFLPの情報センターを手伝っていました。私のボスがPFLPの週刊誌「アル・ハダフ」の編集長で作家のガッサン・カナファーニです。彼から、自分の小説「太陽の男たち」の映画が出来たので試写会をやるから来いよ、と誘われました。どこかの文化センターの一室で、

十数人の身内だけの試写会で、丁度日本から遊びに来ていた女友達を連れてきてもいい、というので出掛けました。ほんの内輪の訳は、PFLP ハバシユ議長らイスラエルに命を狙われている人々を護る保安上の配慮だとわかりました。ハバシユ議長夫妻と、ガッサンの妻アニーらがいました。映画は、後半小説のストーリーと違って、タンクの内から必死にタンクを叩く画面になったとたん、暗闇の中でガッサンが身じろぎし、制作した監督の方を見ました。監督は緊張している風で、みんなを見回しました。映画が終わると、ガッサンが何かまくしたてて、監督も負けず捲し立てていました。ハバシユがニコニコして「いい映画だった」と言って席を立ったので、みなハバシユ夫妻を送りつつ、会はお開きになりました。

翌日、ガッサンに事情を聴くと、ガッサンは、原作通りであってほしかったと話していました。タンクを叩いたのに、世界は耳を傾けず、やっぱり死ぬのは希望がないじゃないか、というようなことを語りつつ、アラビック・コーヒーを啜っていた情景が浮かびます。居合わせたイラク人の映画監督は、サーレフは絵になる最後にしたかったんだろう、闘いを示したかったんだろう、と言っていました。その後 PFLP の 72 年 5 月 30 日のテルアビブ空港襲撃作戦に対する報復で、72 年 7 月、生き残ったオカモトの軍事裁判直前に、ガッサン・カナファーニは殺されます。今回この本を読んで、この映画が 73 年制作と記されているのを見て、ガッサンが生きている間に、もしかしてこの映画にゴーサインを出さなかったのかもしれない、と思いました。ただ、ガッサンの同意を得て遅れただけかもしれませんが。

アルハダフの大きな机で、大好きなアラブコーヒーを啜るガッサンを思い返しつつ、この第二章を何度も第十四章と共に読み返しました。最終章が本のタイトルともなっている「ガザに地下鉄が走る日」。2018 年のナクバから 70 年目の「帰還の大行進」が語られています。1948 年、民族浄化の犠牲者の難民たちが、ガザに 19 万人を超えてやってきます。当時のガザの人口は 8 万人強。70 年後の現在、ガザの総人口は 200 万人。そのうち 7 割の 130 万人が、ナクバで難民になった人たちとその子孫です。ガザの 200 万人の「ノーマン」たちが、人間の諸権利と切り離され、「難民キャンプ」というより「強制収容所」と呼ぶ方がふさわ

しい「ノーマンズランド」の中で、なお帰還を求める大行進の闘いが続いています。殺されても殺されても。パレスチナを占領し、パレスチナ人の帰還を許さないイスラエルは、逆に諸外国のユダヤ系国民を「帰還法」によって、いつも帰還を促し、「国民」の特権を行使させています。このシオニズム批判も著者は鋭い。

そしてまた、2014 年 3 月、封鎖 7 年目のガザのフランス文化センターを訪れた著者が見たカラフルな絵について、最後に語っています。それはガザの地下鉄の路線図。本物の路線図のように精巧で、著者を釘付けにしました。それが、ガザのアーティスト、ムハンマド・アブ・サルが制作した「ガザの地下鉄」という題の、想像上の地下鉄路線図だったのです。ガザから西岸のエルサレムへ行って、アルアクサー・モスクに祈ることもできるし、西岸の人々は、ガザに来て海水浴することもできる。ガザに地下鉄が走る日、西岸の分離壁もレイシズムもない、かつての入植者や難民たちが、断食明けの食事を共に囲む……。ガザの地下鉄は、まだ訪れない美しい希望を「絶望の山」から「希望の石」を切り出す鑿だと、著者は記します。ガザの帰還を求める叫びに対して、著者は「私たちが、この世界を私たち自身のいかなるワタン（祖国・郷土）として想像し、それを全霊で希求するのか、ということと限りなく同義である」と、本を結んでいます。そして、「あとがき」がまたいい。ガザに示されるパレスチナの真暗の闇の中で、もし「私」のために灯が灯されていると知ったら、その灯に向かって人は歩み続けることが出来る、と著者は書いています。「真暗の山中の遠く浮かぶ灯に、私たちもまた、なることが出来るのではないか。いや、そうならねばならないだろう。パレスチナに希望があったら、それは私たち自身のことだ」と。そうあり続けたい。何度も眼元を濡らしつつ読み終えた本です。

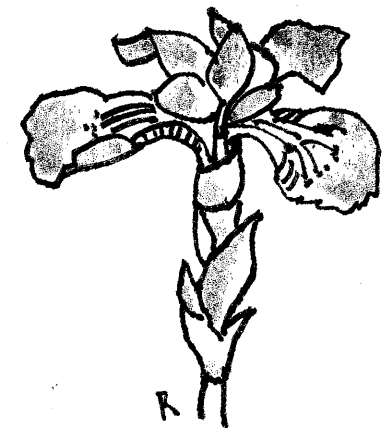
(2月21日記)

島崎今日子著「森瑤子の帽子」(幻冬舎)を読みました。海外に在った私は、森瑤子を知りません。本を送って下さった友人は、「重信さんのご存知のない作家だと思います。1940 年の生まれの人ですから重信さんより上の世代でバブルの日本を疾走した作家です。きっと重信さんとは真反対の

場所を望んだ人ではないでしょうか。」とお便りで述べていました。どんな人だろう。真反対の望みの場所とは? ぜひ読んでみたい、そして読みました。自分が大切に築いた家産、夫、娘たちとの矛盾を痛々しい程に広げながら、自分を犠牲にして「なりたいた自分」をつくりあげ疾走し、52 歳癌で死を迎え、葬式まで自ら演出して逝った強烈な自我の作家森瑤子。そのペンネーム「森瑤子」と、森瑤子になる前の伊藤雅代として生を受けてからの生涯を、多面的に照射して、深く時代の中の森瑤子を評論しているのがこの本です。

「消費文化が爛熟した 1980 年代は、また『女の時代』でもあった。自己表現を求めて女たちは欲望を解き放ち、出版の世界にも若い女性の書き手が次々と登場した……。男女雇用機会均等法が制定され、日本がバブルの頂上に向かおうという時である。そして、この時代の女たちには、誰もが『憧れる』と口にする先駆的な存在がいた。作家の森瑤子が、その人だ。」「大きなつば広の帽子やデコレーションケーキのように細工された帽子は、まるでカシニョールの絵に描かれた女性が被るそれであった。我々が森瑤子をイメージする時に、真赤な口紅と大きな肩パットと並んで帽子は欠かせないアイコンである。」と語る著者の筆から時代の肖像のような森瑤子の姿が鮮やかに浮かびます。86 年の男女雇用機会均等法までは、女性の選択の幅はまだ狭く限られ、大学を出ても専業主婦になる人が大半の時代であった。その時代の 1978 年、「若さをはぎ取られていく女の焦燥を描いた『情事』ですばる新人賞を受賞したのは 38 才の一人の主婦であり、英国人の夫と 3 人の娘と暮らす伊藤雅代であった。彼女はかつて 6 才から 22 才までバイオリンを習い芸大で自分には敵わない才能を持たった同級生の林瑤子と出会います。雅代はバイオリンをあきらめますが、この憧れの友の名を借り「森瑤子」のペンネームで文壇デビューします。

夫との矛盾や倦怠、夫以外の人を愛すること、子育ての悩み、女性の主体的でまっすぐな欲望や本音を晒すような作品群によって、森瑤子は多くの女性の共感を呼んでいきます。作品ばかりか、そのゴージャスな生活スタイル — 服装、ブランド品、軽井沢や与論島にある別荘、カナダの島を買う、豪華ヨットや車といった — は、バブルの時代が彼女に体現されカリスマのように注目されていきます。しかしその一方で伊藤雅代を愛



した夫や、3 人の娘たちは、「森瑤子」として書き生きる妻であり母に振り回され、対立・矛盾が並行して広がります。

それでも森瑤子でありつづける彼女は、その溝を埋めるために物や金でしか解決しえず、その分更に満たされない自分や家族を書き続ける中で、愛情が溢れつつバラバラになっていく家族の一人一人の姿を著者は執拗に暴き記しています。それを可能にしているのは著者の力です。

すべての森の著作を読み熟慮したばかりか、森瑤子・伊藤雅代を知る人々 — 夫、3 人の娘、兄弟はもちろん大学時代の友人や雅代がもっとも愛した故元婚約者を知る者たち、バブル時代の友人と一緒に仕事をした人々に至るまで — を膨大なフィールドワーク・インタビューを重ね、その中から人々から漏れる本音をつかみその本音と、森の作品のことばの引用文とシンクロさせまたは比べながら — ある時には森の作品とマッチし、ある時にはその虚飾の記述を暴き詳らかにしながら — 森瑤子の実像を容赦なく描き出しています。そしてまた、他の作家の森に関して記した文や、インタビューからつかみとる著者の数々の指摘が鋭く面白く森瑤子を浮かびあがらせるのです。例えば、小池真理子の話。憧れの先輩作家森から「私にはお友だちがいないの。だから、あなたと親しくなれて、嬉しい」と手紙をもらって有頂天になりランチに誘われて出向くと森は大勢の人とテーブルを囲んでいてひどく落胆したエピソードを語り「森さんは誰にも本音を見せないのだな、ということと、にもかかわらず、すべての人に本音で話しているようにふるまう方なのだな」と書いた一文を著者は見逃しません。著者はまた森が

通ったフェミニストカウンセラーの河野喜代美をインタビューし、一対一の対話が苦手だった森について語らせています。「あの華やかな外見に比べれば、内面が空っぽで内実の伴わない生き方をしてきた人だとも言えますね。決して悪い意味で言ってるんじゃないですよ。」「実存の曖昧さ、危うさといった方がいいのか、物理的にはそこにいるけれども魂が彷徨っている」と。

そして更にインタビューに応じた森瑤子に対する林瑤子の戸惑い。林は名前を勝手に使われていやだったこと、彼女に自分の生き方をかきまわされたくなくて距離を置いて生きてきたにも拘わらず、森の遺言で聖イグナチオ教会で、森自身のプロデュースした告別式で「タイスの瞑想曲」をバイオリンで弾き、3人の娘たちに先んじて真紅のバラを献花させられつつ、森に暖かい眼差しを向けて語っている姿を著者は活写しています。葬式まで自分の手で美しい終演を演出した森瑤子。(そのために3人の娘たちは、洗礼をあわてて受けています)「なりたい自分になる」強烈な斗いは、自らをも犠牲にし、でも途中から彼女自身の持っているサービス精神の迷路にはまって助けを求め続けていたようでもあります。

突然の早い癌告知、余命3ヶ月の定命は、家族たちと愛を復活させ、友人たちに愛され、愛を与え人々を魅きつけたまま生を全うします。そこには森瑤子、いや雅代の持つ人間性の暖かさ故の終演だったと思いつつ読みました。それはまた、著者が読者に与える思感でもあるように思えます。

夫・娘らを愛しながらも自分の「書く」という目標を揺るがせにしない分、結局犠牲を強いられ

た娘たちとの関係と、その後の娘たちの自立した姿……。それには、私自身自らの「闘う」という意思と生き方の中で結局多くの犠牲を強いてしまった娘との関係を重ねつつ読み胸に痛く響きます。森瑤子の愛したブランド品なんかより良品を格安でゲットすることを喜びとする私にとっては、森の生き方は私の思考の外の世界でありながらその点は身につまされました。

でもまた、こうも言えると思います。伊藤雅代は芸大生として私たち世代より早くに、アバンギャルド、「風月堂」「ジロー」の文化や風俗を愛した時代の一人であり、その空気 — それらは私たち世代のベトナム反戦や学園斗争へと引き継がれるのですが — を嘲笑した学生の一人であったのです。それが、彼らの世代も私たちの世代もまた自由を渴望し、「おしきせ」や家族制度のしきたりを脱ぎすて、斗いの中で自己解放しその後の挫折を経つつ何かでありたいと願いつつ若さが不似合いになっていく多くの自覚した女たちからの支持を得る基盤となったのだと思います。

著者が、多方面の有名・無名の人々のインタビューから掬いとり浮かびあがらせた森瑤子の生と死、そして尚生き続けている現在のつながりある人々の心情含めて描いた風景とそれぞれの姿は時代の文化論としても価値があると思いつつ読みました。そして実感しました。バブルもその後のかわった日本も私はあまりにも知らない……と。

(3月1日記)

“夫も娘もまた自らをも犠牲にしなりたい自分森瑤子になる”と、零れました。

後記

5月26日に「5・30リッダ闘争47周年集会」が行われました。広瀬純氏(専門は映画論・現代思想など)の講演といくつかのアピールの後、リッダなど闘いの途上で亡くなった人たちへの献杯をし、参加者の交流が行われました。残念なことですが、年を経るごとに参加者が少なくなる感もあります。今回の参加者は約30名でした。マスメディアでのパレスチナ問題へのアプローチも少なくなり、また一方的な報道であったり、若い世代の人たちにこの闘いの真実をどう伝えていくのかこれからの大きな課題です。

重信房子さんへの郵送アドレス 〒196-0035 東京都昭島市もくせいの杜2-1-9 重信房子

連絡先 〒105-0004 東京都港区新橋2-8-16 石田ビル5階

救援連絡センター気付 「重信房子さんを支える会」

郵便振替 00110-4-613941 オリーブの樹

≪正誤≫表

第 146 号

- ①3P上から1行目 ~会合を 5月に→会合を 6月に
- ②5P(2/21)左上から7行~8行目 今日はさんはTさんの→今日はTさんの
- ③7P(3/19)上から2行目 高原さんは感情的~→高原さんは「感情的~
- ④7P(3/19)上から7行目 故人を偲べば→故人を偲れば
- ⑤7P(3/19)下から1行~2行目 ~くれた和尚能力にとっても→和尚にとっても
- ⑥10P左下から2行目 ~生きていくことを→生きていることを
- ⑦10P右上から7行目(短歌) ナクバの日々を共は語りぬ→日々を友は語りぬ
- ⑧11P左上から12行目 21世紀勝まで→21世紀勝つまで
- ⑨11P左上から14行目 民主主義な→民主主義的な
- ⑩15P左上から6行目 「連隊」→「連帯」
- ⑪15P右上から1行~2行目、8行目 アンリ・クリエル→ヘンリ・クリエル
- ⑫16P右下から3行目 2000年→2003年